第18回横浜大会から

はじめに ： 毎年予算期の11月には開催地に出向いて市（町）長に後援と助成方をお願いしていたので、出かけようとしたら担当局が公害対策局か緑政局か、また教育委員会はどうかかわるのかなど分らないから待ってほしいとのことだった。年が明けて3月になってもはっきりせず、うかうかしていると開催が危ぶまれる恐れもあるので、連絡打合せの窓口が横浜ほたるの会の丸茂氏に決まったので、電話と速達で打合せることにしたが、横浜での打合せが1週間に1度とのことで、向うからの返事は遅れがちだった。それに横浜では大会前にシンポジウムを開催したいとの強い要望があり、岡崎大会のさい報道関係者から全国大会の影がうすくなった。主体性がボケているなどの批判や会場設営など支障があったので、大会に組替えてほしい旨要望したが絶対にそのようなことはしないからとのことで容認。結局本会は過密スケジュールで運営することになり、何かと心配することの多い大会を迎えることになった。

シンポジウム ： 市の指示で主催者に全国ほたる研究会が加わることになって、筆者事務局長が開会の挨拶をした。参加者の地域は広く会場一杯の盛況で、「ホタルの一生」のスライド、講演、ホタルの飛び交うまちづくりの事例報告等があって無事終った。

横浜ホタルの夕べ ： 朝からの雨も上がり、親子連れの大集団がこども自然公園のゲンジボタル発生地に集合した。2～3匹飛び出すとワーッと歓声が谷間に響いた。まだ時期早とかで飛翔数は少なかったが、住民のホタルへの憧れの大きさに驚いた。宿に帰ったのは20時半を過ぎていたが、これから会場作りをするという。

会場作り ： 21時から大会と総会の会場作りが始まった。横浜ほたるの会（以下横浜ほたる）、まいおか水と緑の会（以下まいおか）の会員約数十名によって、一気に作られた。筆者は指図しただけだったが、少々疲れたものの心配していたシンポジウムといい会場もなんなく設営出来てホッとした。

研究大会 ： 9時40分開会、田中公害対策専任主幹、中島市議会代表、伊藤戸塚区参事の祝辞があって、研究発表に移った。出席者は約100名で北は北海道紋別市、南は九州長崎市から会員の出席及び参加者があった。発表は本年もスムーズに運び予定よりも30分間早く終ったので、研究雑感を1人7分間で説明してもらった。

総　会 ： 4時15分開会、三矢氏を議長に選び、会計報告の中で20周年記念事業を予測して節約したこと。運営では20周年記念事業について協議した。つぎに入会金徴収の提案に対して1,000円に決定した。公的機関（グループ）の会費は値上げして、大会誌を2～3部送付したらとの提案があったが決定しなかった。会長選出は第16回大会で満場一致で推した羽根田氏が今回心よく承諾され、会場の挨拶があった。大会宣言を決議して17時30分閉会した。

歓迎会（懇親会）と座談会 ： 研究大会会場を横浜ほたる、まいおかの会員の方々が畳を運び入れ、歓迎会場に模様替え、宴会の場となった。宴なかばにして座談会に入ったが、2日間にわたる会議疲れか盛りあがらなかった。

見　学：市内外人墓地を経て発生地の谷戸、港がみえる公園を見学して12時ごろ散会、雨が待っていたように急に降り出した。

本大会は出向打合せが出来なかったために、心配していたが、実にスムーズに運んだ。これは公害局ならびに関係当局のご助成と丸茂氏のご努力ならびに横浜ほたる、まいおか他関係会員方々の並々ならぬご協力の賜である。また、植村氏は病後にもかかわらず何かとお世話をしていただいた。各位に厚くお礼申し上げる。

雑感・報道のむづかしさ：６月10日朝ＮＨＫのテレビを一同で視た。銀座の街角の仮設飼育室前で全日空から運ばれたホタルが映り、ついで岡山県の矢掛町のホタルの缶詰そして７日夜の谷戸の現地調査状況とホタル、８日のシンポジウムの状況が映った。解説で自然保護とホタルの自然発生への努力を取材者は強調したのであろうが、一般の視聴者にはホタルの缶詰に関心があったようで、説得のむなしさをおぼえ、ホタルを看板にしたふるさと郵便のあり方に憤慨した。

ついでだが、60年７月17日のＡ新聞の気象欄に、こけしの里鳴子町役場は観光ＰＲで東京へ持っていくホタル集めに忙しい。夜になると職員が捕虫網を手に、あぜ道へ。１匹50円の手当が出る。目標は2,000匹だそうだ。という記事が出た。これを読んだ知人からなかば抗議の手紙をもらった。これは取材記者が本当のことを書いただけであろうが、怒りとも、なんともやりきれない気持ちになった。